

---

# 魔法少女リリカルなのはRewrite

由真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはRewrite

### 【コード】

N9916Z

### 【作者名】

由真

### 【あらすじ】

『転生者、暴れます』

ある日、ひとりの少年が交通事故で死ぬ。

本来はそこで人生は終わりなのだが、どこからともなく現れた女によって転生させられることになる。

命令は、『蒼く澄んだ瞳の少年を探せ』……………。

その訳の分からない命令と僅かなヒント、そして対価に得た超常的な力を手に、少年はこの世界をひた走る。

途方もなく深く黒い交錯、そしてその運命に巻き込まれる二人の少年と魔法少女達。

魔法少女リリカルなのは Rewrite、始まります。

## Prologue (前書き)

勢いでプロットから能力まで4時間で決めた。後悔はしてない。

ほかの知らない人とかの見知らぬネタと被っても振り切る覚悟で書いていきます。

……だけど、知ってる作品とは極力被らないようにしないとね……  
……。

## Prologue

ここは地球。

取り留めて何も無い、我々がよく知る地球。

強いてあるとすれば、昨今から云われる地球温暖化、異常現象などが謳われる。

そんな地球の日本、とある都道府県の郊外の道をひとりの少年が歩いていた。

見た目は至って普通だ。どれを取っても一般的なルックスと身体能力。背は若干低い。

ただ、頭の中身は日本の高校生では最高クラスにある。

「はあ…帰ったらまた勉強なんだろうな。いつたい息子の人生をなんだと思ってるんだ」

少年はぶつくさ言いながら、音楽プレイヤーを片手に街路をひた歩く。

聞いている音楽は『PHANTOM MINDS』。

むしろ、劇場版魔法少女リリカルなのはの曲だ。

そう、彼は所謂オタクと呼ばれる人間である。

親に隠しては、アニメグッズを買い集める範囲で揃えては楽しむ。親は

それを許してないから、見つければ思い切り説教されるし、集めたものはことごとく捨てられた。

その中でも、とある声優が一番好きであった。機会があれば、ライブコンサートにも行きたいと願う程である。

この曲があまりに好きなものだから、これを聞いている時は文字通り何も聞こえなくなる。

……そんな時、悲劇が起きた。

「えっ

」

気付いた時には、トラックが目の前に迫っていた。

「……………」

少年は目を覚ます。

先程まで目の前にあったトラックはいずこへ、あたりは上下左右真っ暗でしかなかった。

しかし、地面にいるという感触はあった。試しに未だに身に付けていた時計を落としてみたら、コツンという音がする。

「くそ……いつたいどこだよ、ここは。まさか死んだんじゃないだろうな」

自分で言ったのにも関わらず、まず死んだだろうなという思いを持っていた。

少年は最後に見えた映像のブレ方から速度を割り出し、見えた感じの仮の質量、予想ブレーキ位置等を考慮した結果、醜い肉の塊になるのは必至だということが分かった。

だからこそ、がくつとうなだれる。

「マジかよ………案外ポツクリ逝くもんなんだな、人間って」

そんなことを言いながら、少年の瞳は絶望には染まっていなかった。実際、生きているほうが地獄だと感じる時期もあったんだ………それなら、別にここで終わってもいい。

「………だけど、願うことなら」

オタクの人間なら、誰もが憧れる二次元。そこで最高の力を得て敵を蹂躪し、女の子に好かれたい。

そんな願望を抱いても、所詮それはエンターテイメント。二次元に行けば、二次元が自分の三次元に昇華されるだけに過ぎない。

……だが、少年はそうしたくて二次元に行ってみたいとは思っていない。

というか、恋愛は正直どうでもいい性格だった。

ただ、生まれ変わるならこの世界よりかは別の世界で生きたい。その程度の願望である。

そして、それを思ったとほぼ同時に、正面の足元に幾何学的な紋様が浮かび上がったかと思うと、そこから人が現れた。

「うわあああああ!!!?!」

少年は慌てて飛びすぎる。

「……そこまで驚くかしら」

魔法陣から現れた人は女性とおぼしき声を発する。

黒いフードを被っており、全容はよくわからないがわずかに見える肌を見る限りでは女性であった。

「いや驚くつて。で……ここは死後の世界であつてるのか？」

「正確には死ぬ直前よ。ほら、よく言うでしょう？死ぬ直前には走馬灯が見えると」

「大してかわらないじゃん」



少年はため息をついた。  
それは女にとってはどうでもいいことで、スルーして話を進めはじめる。

「ところで、あなたは願望があるんじゃない？」

「え……」

少年はドキツとする。まさか心の声が聞こえたんじゃないだろうか。

「ふむ。第二の人生を歩みたいのね」

「駄々モレ!？」

少年は嘆いた。しかし、女は待つことをしなかった。

「その願い、叶えてあげる。ただし強制イベント」

「え」

強制イベントという単語にげんなりとしたが、自分のささやかな願望が叶うならまあいいかな……少年はその程度に思っていた。

「まあいいじゃない。見た目や能力はあなたが望むものを差し上げましょう」

「…それがいわゆるチートや厨二設定と呼ばれるものになってるか」「ええ、もちろん」

わずかに心が高鳴る。と、同時になんだかんだで最強に憧れる自分が悲しくなった。

「でもやつぱり強制イベントで」

「結局かい!!」

「ええ。容姿はイケメンで良いわよね？そうね、茶髪で黒く澄んだ瞳でいいかしら。体は……9歳ね」

「待てい、なんで9歳なんだよ」

「対価よ、文句ある？それともこのまま死ぬ？」

「若返りサイコオオイヤツフウイイイイイ!!」

少年はただでさえ生き返れて、さらに能力をくれるというのに出過ぎた真似だと思った。

「そうそう……能力に何か注文は？」

「注文？」

「どうせなら好きな能力は最低限使いたいでしょ」

それもそうだと思う。そう考えた少年は女に軽く耳打ちした。

9

「……なるほど。だけど三つ目の能力については一部改変させてもらうわ。それはベースが悪いと宝の持ち腐れになるから……」

「ああ、構わない」

「なら……決まりね」

女は妖艶に微笑む。

と、そこで少年は女に疑問を投げかけた。

「それで。俺になにをさせたいんだ？転生させてこんな能力まで寄越して」

「……………暇潰し？」

「オオオオイ!!!!」

「さ、いつてらっしやい」

女は指をパチンと鳴らす。すると奇妙な風の奔流が少年を包み、足元に幾何学的な紋様が現れた。すでに、その能力が付与されていたからか、少年にはそれが転送魔法だということがわかった。

「テメツ、どこ飛ばす気だ！」

「地球よ」

「地球かよ！」

また逆戻りかと、少年は怒鳴る。

「地球といつてもあなたの地球じゃなくてよ」

「はあ!？」

「そこへ行つて、あなたは茶髪で蒼く澄んだ瞳の少年と出会いなさい。大丈夫、変なことしなければ会えるから」

「はあ!？」

「ヒントは、魔法少女、守護騎士、闇の書……そして時空管理局」  
少年を包み込む奔流が激しさを増し、ついには少年の体を飲み込んだ。

「大丈夫、失敗したらリプレイ出来るから 頑張れ少年」

「ちょ、待てよおおおおお!!!!」

少年は、そのまま魔力の渦に飲み込まれた。

取り残された女は、上を崇めながら呟いた。

「少年の道に、幸おおからんことを」

ここは時空管理局という組織が管理している世界のひとつ。

あたりはすでに暗く、遠くでは森のさざめきや生物の鳴き声も聞こえる。

その寒気際立つ森の中を、一人の少年と一匹の異形な何かが駆けていた。

「ダアアアッ!!!」

少年は襲い掛かる敵に気合の一閃を振るう。

その一撃は敵を簡単に切り裂き、敵は血の飛沫をあげる。

しかし、敵の猛攻は止まらない。

「来るなッ来るなアアアア!!!」

絶叫しながら、正確無比な攻撃を叩き込んでいくが、敵は倒れる事を知らない。

さて、この少年の説明をせねばなるまい。

少年は茶髪で寝癖が酷くなったような髪型で、体躯はまだ10歳程度のものであった。身に纏うのは、病院に入院する子供が着るような病院着に似たもの。

そして、少年の手には剣型のデバイスが握られている……と言っても非人格型で且つ、非殺傷設定などという魔導師のデバイスになくはならないものを備えていない。

実質、合法質量兵器といっても過言ではなかった。

少年は追いつかれては斬り、追いつかれては斬りを繰り返していた。それでも、斬っても斬っても速さは衰えるどころか逆に増しているようにも見えるのだから、子供には行き過ぎたホラー以上の恐怖を与えていた。

「来るなアアアアア!!!」

少年は、振り返り様に自分の限界にまで練り込んだ魔力を蓄えた剣で斬り上げる。

斬り上げた瞬間に、蓄えていた魔力を一気に解放したため魔力爆発

が起きる。

「ハアツ！はあ……ひつぐ……はあ……ぐ……はあ……」

激しい息切れと、8割以上が吹っ飛んだ敵の体を見たときの僅かな安堵からくる涙。

この時の状況は、同年代の子供は元より……大人でも堪え難いものであることには変わりない。

それでも、この10歳の子供は限界が見えていたとは言え耐えきっていた。

しかし。

その安堵は次第に絶望に変わる。

完全にはないが、再起不能なまでに吹き飛ばした。それなのに、どういうわけか敵は完全に再生していた。

「あっ………あっ………」

急に立ち止まり、胸の早過ぎる鼓動に体もついていけない……体力だつてもう限界を超えている。

早い話、立って剣を構えているのも精一杯なのだ。

助けはこない。逃げてでも逃げられない。  
唯一、助かる手立てがあるとすれば…自らの手で敵を倒すしかない。

敵がゆっくり品定めをする。少年は固まっただまま…いや、それでも戦闘体勢ではあった…敵を見据えていた。

ここで、少年の記憶は一旦途切れることになる。

## Prologue (後書き)

閲覧ありがとうございます。

現時点では二人の主人公の名前は明かしてません。  
一人についてはしばらく後になります。

とりあえず、転生させたほうから書いていきます。  
応援していただければ、幸いです。



## 第1話 選択（前書き）

第1話……短いですが、ご了承ください。

## 第1話 選択

「う、うぐ………」

俺：舞阪千里は目を覚ました。：オイ、女みたいな名前っつーな。

起き上がって辺りを見渡すと、今までの風景とは別の……とはいえ  
今までと大差ない世界が広がっていた。

「あのアマ……次会ったらシバいてやる」

いきなり転生だとかチート能力だとか。意味分からねえぞタコが。  
……まあでも能力をくれたのは助かる。転生させて命令をやれでハ  
イオシマイだとどうしようもないしな。

とりあえず……くれた能力を確認するか。まずはそれからだ。

俺は手を軽く開いて念じる。

「ゲートオブパピロン  
……王の財宝」

すると、長いなにかが輝きを放って現れる。それを握って確認する  
と愕然とした。

「……まさか当たり前のように出るなんてな……『アロンダイト  
刃毀れを知らぬ剣』」

デュランダル  
絶世の名剣と一、二を争う名剣のひとつである刃毀れを知らぬ剣。  
女が付与してくれた能力はしっかり起動する。  
この分なら、約束エクスカリバーされた勝利の剣もちゃんと入っているだろう。  
安心した俺はアロンダイトを戻した。

そして次に必要なのは寢床。なければさすがに死ぬ。

………が、どうしようか。正直なところ（ヒラリ）おっと何かメモ  
が。

『仮住居 海鳴市南青山三丁目12-10 謎の美女より』

ちょ、美女で。つかなんてご都合主義。まあ今回はそれに乗っかる  
としようか。

俺は住所が示す場所へ向かうことにした。  
ナビ？魔法でチヨチヨイのチヨイやで！

ここは示された住所にあったアパート。それなりに綺麗で、なぜか自分の表札もかかっていたので見つけるのはたやすかった。

「うん、ごちそうさま」

カップめんを食した俺は、とりあえず布団の上に寝転がった。

「しかし驚きだな…質素とはいえ生活には困らないようになってるし」

食料も、当面は困らないようになっていた。しかし、どの道自分で稼がなきゃならなくなる。そうなった場合、自分で変身魔法をかけてアルバイトか……。

いや、そんなことを考えるのはよそう。まず考えなければならぬのは…女の発した言葉だ。

ヒントとして、女は魔法少女、闇の書、守護騎士、時空管理局と言った。

そしてこの住所。

「海鳴市……」

生前に貯めたアニメの知識を総動員させて、この単語が関わる作品

を探し出す。

無論、その答えはすぐに出た。

「魔法少女、リリカルなのは」

高町なのはが、魔法を通して仲間と出会い、敵と対峙して己の想いをぶつけ合う熱いアニメ。

「ーことは、今俺はリリカルなのはの世界にいるのか。」

「なんでリリカルなのは？と思ったが、それはどうでもよかった。」

つまり、魔法少女は高町なのは。

となれば、闇の書と守護騎士ってのは八神はやたとシグナム達ヴォルケンリッターだろう。

ここで、現在の時間軸はA'sだと判断した。

そして時空管理局。こいつは…高町なのはが現在進行形で協力している組織だ。そしてこの世界で絶対権力を握る。

そして命令は、『蒼く澄んだ瞳の少年を探せ』。

全部照らし合わせたら、全員と何かしらの関わりを持ってということなんだろう。

関係を持つってのはこれらのキャラと何かしら接点を持ちさえすれば簡単だけど……………。

「問題は、最初に誰の陣営に付くか」

A's においての主な陣営は三つ。

一つ目はなのはら管理局。

二つ目ははやてらヴォルケンス。

三つ目はギル・グレアムのとこだがまずこの選択はない。

原作に忠実になるなら、最初はなのはらが負けるようにするためにはやてらに付くべきなんだが…これから先を考えたら、なのはらに付いた方が人間関係的に有利だ。

…まあ人間関係つかハーレムには興味ないし。なっちまったらなっちまっただ。

それに、なのはとフェイトの最強コンビは自分の能力を試すには絶好の機会かも知れない。

「…明日は図書館行ってみるか」

あそこなら、必ずはやてに会えるはず。  
そう決めて俺は寝た。

## 第2話 行動

次の日。疲れていたからか、昼前後に起きた俺はかるく昼食を済ますと海鳴市の一番大きな図書館を目指していた。

理由は簡単、最初は八神陣営から始めようと思ったから。

え、管理局側なら楽しじゃね？とか思う人もいるけど、それではいきなり原作ブレイクすることになる。それは原作者として正直回避したかった。・・・だけど、回避できる悲劇は回避したいかな。

というわけで、目指す先は八神はやてがよく利用している公立図書館。とにかく、出会ってから勢いでやっていこうと思った。

ちなみに身長は132cmくらい。同学年ではかなりでかいほうだろう。

……まあ、どうせ小さいですよどうせ。

「やて、ここか」

なんだかんだ話していたら、もう図書館が目の前に見えていた。

…分かっていただけ、でかい。

これは…自分が住んでいた街の図書館よりでかいんじゃないか？

「……寒ッ」

思えばA'sは秋が深まる季節。昼時とはいえ、寒くなるのでさっ

さと中に入ることにした。

中に入った俺は、蔵書の量にまたしても驚かされることになる。  
専門書や文献はもちろん、童話や最近の雑誌に文学小説、果てには  
漫画やラノベまで置いていた。

…漫画に関しては、魔法少女リリカルなのはに関するものは全くな  
いということ以外変わりはない。

「うわ…：ほんとになんでもあるな…。こっちにはバカテスに禁書  
録に超電磁砲…：ライディーンとか誰が読むんだよ」

とか言いながら読んでしまうのがオタクの性。  
元いた世界ではまだ売り出されていなかったものを手当たり次第に  
読んでいく。

少年熱読中……



「く……っ、まさかの自己犠牲かよ……泣かせてくれるぜ」

八神はやてに会うことも忘れて、漫画を熟読していた。

ふう、と本を閉じて壁掛け時計を見ると……

「ゲツ、閉館30分前!？」

ヤバい!本を読むと時間を忘れるというのはよくあるけど尋常じゃないぞ!?

急いで本を閉じて周りを早足で歩き回る。

すると、すでにお目当てのものを手に入れたのか、はやては小さい赤髪で三つ編みの女の子……間違いなくヴィータだな……が図書館から出ていこうとしていた。

見つけるが早し、追い掛ける。ヴィータから自らの魔力を察知されないように、強度の認識阻害魔法をかけてから追い掛ける。

これなら、普通に歩いていてもばれることはない。

どうせバレないなら、ちよっと並走してみるか。そう思った俺は、自然な感じではやて達に並ぶ。

「はやて、今日は何借りたんだ？」

ヴィータが車椅子に腰掛けたはやてに問い掛ける。

「ん?今日はちよっとした童話だけやよ、ヘンゼルとグレーデル。」

帰ったらヴィータに読んだげるな」

「ありがとう、はやて」

とても他愛のない、日常的な会話。そうすると……。

「ちょっとお嬢ちゃん。ボク達と遊んでいかないかい？」

「お兄ちゃん達が楽しいこと教えてあげるよ」

えー、なにこのテンプレ展開な感じで、チャライお兄ちゃん達のはやてとヴィータに絡んできた。まあ9歳とはいえ素材がいいしな……って感心してる場合じゃない！

「ほら、行くござッ」

「きゃ」

「おいテメエはやてに気安く触んじ」ロリコンかテメエら……！」「つて誰だよ……！」

ごめんよヴィータ。こんなロリコンヤンキーには我が秘伝の最終奥義をだすしかないんだよ。

「え、キミこのコのガールフレンド？」

「ヒューカツコイイー（笑）」

ギャハハハハと下品な声で笑い出す。

いいぜ……ガキがガキ通りの能力通りだと勘違いするなら、その幻想をフレンドぶち壊す……！！

「で？ボウヤになにか出来るの？」

「みっちゃんやめてやれよ……コイツびびっぎゃあああたたあああ

……！！」

俺の渾身の崩拳を叩き込んでやった。もちろん、手加減ハシテマスヨ？

みっちゃんとやらを吹っ飛ばしたためか、周りのヤンキーが激昂した。

「テメエ！（バキッ）がはっ！！」

「よくもやりやがったな！？（ドカッ）ゴハア！！」

ザコ共が！テメエごときが俺に勝てると思っな！…まああの女のおかげだけさ。

で、助けられたはやてとヴィータは。

「……………」  
「……………」

若干引いていた。  
当然の反応だ。

「えと……大丈夫？」

「大丈夫やないな……後ろのお兄ちゃんらが」

まあ素手の全力で殴ったしな。少なくとも内出血は免れない。

「オマエ……体に異常があるんじゃないかねえか？」

「大丈夫、昔から体は丈夫なんだ」

「まあなんにせよ、助かったわ。ありがとな？」

「いいえ、どういたしまして」

ぐあ、可愛すぎる。可愛すぎるぞはやて。って待て！断じて俺は口  
リコンじゃない！

「えと、良かったら送っていこうか？またあんなのに襲われたらど  
うしようもなさそうだし」

「んー……せやな。せつかくやしお願いしよか」

「でもはやて……」

「それにヴィータも公にはやれんやろ？」

公にやれない……無論鉄槌の騎士の力だろうな。あれを使えばあんな  
のは簡単に潰せるだろうけど、一般人には使っちゃまずい。もちろ  
ん、あえて気にしないことにした。

「せやから。お願いしよ？せつかくかつこええ男の子がボディーガ  
ードやつてくれるんやから」

「……分かったよ、はやて」

ヴィータは渋々頷いた。それを見てニッコリと笑ったはやてはこちらを見る。

「ほな、お願いな？えと…」

「舞阪千里。千里でいいよ」

ちなみに苗字は本来の苗字から変えた。昔の苗字は面白くないし…名前を変えなかったのは、やっぱり腐っても親から貰った唯一のもの。愛着はある。

「私は八神はやて。はやてでエエよ。こっちは…」

「ヴィータ」

「じゃあはやてにヴィータ。よろしくな」

こうして、八神家に行くことになった。

## 第2話 行動（後書き）

はい、第2話でした。

一話一話の短さは、勘弁してください。

駄作ですが、これからも魔法リリカルなのはRewriteをお願いします。

第3話 いや、こんな展開じゃなかったよな（前書き）

実はA'sはおぼろげにしか見てません。

ごめんなさい。

### 第3話 いや、こんな展開じゃなかったよな

で、俺は八神家のリビングにいる。うーん・・・大丈夫かな・・・。魔力もちばれないかな・・・。主にシグナム姐さんとシヤマルさんに。

「それでなー、この千里くんが格好良く現れてチンピラたちをやっつけたんや!」

こう・・・ばーん!てな・・・と、興奮しながら身振り手振りをつけて、シグナム達に説明するはやて。

よっぽど助けてくれたのがうれしかったんだなと、俺はちょっと嬉しくなる。

「そうなんですか・・・千里くんありがとうございました」

シヤマルは深々とお辞儀をした。

「いえ、僕もちよっと怖かったですけどねー(副音声:余裕過ぎてハナクソが出そうでしたけどねwww)」

「別、こいつが出てこなくてもあたし一人で倒せた」

「もう、ヴィータは意地っぱりさんやな」

「べ、別に・・・」

おーおー。顔赤くして顔そむけちゃって。動揺が見え見えですよ。それを軽く見届けて、はやては車いすを動かす。そしてキツチンに向かいながらこちらに向かって声をかけてくる。

「ほな、夜ご飯作るなー。よかったら千里くんも食べてってや?」



「い、いいのか？」

「うん、千里くんが良かったら泊まってるっていいんやで？」

いくらなんでも助けただけでそんな優遇されていいんかね？という  
か9歳とはいえ男なんだけど。とりあえず、シャマルとシグナムに  
視線を送って見る。

「私がかまわないですよ」

「私も、主はやての命ならば」

「なんでだよシグナム。こんな胡散臭いやつ泊めていいのか？」

「主の命を聞けないのか？」

「いや、はやてがいいんならいいんだけどさ……」

そこでヴィータがどもる。少し怪訝に感じたシグナムは顔をしかめ  
てヴィータを見つめた。

……やばいな、ヴィータのやつ俺の身体能力疑ってるな。魔法は  
使ってないけど、身体強化魔法はばれないように詠唱破棄でかつネ  
ギまの『戦いの旋律』メローディア・ペライクスを使っておいたんだが……魔力は魔力って  
事か。成分が違ってもなにかを使ったのは感じ取れるんだという事  
が分かった。

「まあ、なんにしても客人だ。もてなすぞ……ふむ」

「舞阪千里です」

「よろしくな、舞阪」

シグナムはあえて苗字で呼ぶのか……思えばなのはは高町、フエ  
イトはテストロッサー辺倒だったな。

それはどうでもよくて、その時のシグナムの目が戦士を見るような  
目だった。

え、一（物理攻撃的な意味で）襲われるフラグ？

はやてのおいしいご飯をいただいてから、風呂に入りあー疲れた。と、リラックスモードでいた。その間、はやてに質問攻めを食らっていた。

「なあなあ、千里君はこの学校通ってるん？」

「最近引越してきたばかりだから。まだこの学校行くとかは決めてないんだ」

「そうなんや・・・私は体に不自由抱えてるから、学校お休みなんや・・・」

そう言つて、若干憂鬱な顔をするはやて。そばで話をにこやかに聞いていたシャマルはすこし顔を強張らせる。

そりゃ闇の書の副作用だもんな。そんなことをうっかり洩らしたら最後、はやてがどう思つか考えただけで恐ろしいんだろっ。

・・・やべ、フラグ立つようなことはしたくない。でも、言わなきゃなんか可哀想だ・・・。

「大丈夫だよ。治してやるって気持ちをしっかり持ってたら絶対治るから」

「え、でも・・・」

「でも、待ったはなし。なんなら、俺が・・・大きくなったら医者になって治してやるよ」

「あはは・・・ほんなら気長にまたなな」

はやては苦笑いを浮かべる。いかんいかん、口が滑って今すぐ直し

てやるなんか言ったら原作がいつきにおじやんだ。

「くあ……」

「はやてちゃん、眠たいんですか？」

「ん……もう10時なんやな。ほな、私は寝る準備するわぁ……」

ふわぁ……と、かわいらしい欠伸をしながら、はやては車いすを動かしていった。それを介護するためにシャルが追いかける。

……その時、何かしらの結界が張られた気がした。

この魔力の感じ……シャルか。離れたと同時に結界が作動する術式を組んだようだ。それに呼応して、騎士服姿のシグナムとヴィータが飛び込んでくる。

「……9歳の子供にいきなり剣を向けてくる騎士がどこにいるのやら」

「悪いな、ここにいる」

と、レヴァンティンの切っ先をのど元に突き付けてきたシグナム。ついでにヴィータもグラーフアイゼンを担いでいる。

「オマエ、はやてを助けるときに魔法使ったろ。それはその辺の身体強化魔法程度のものは言え、アタシ達が見たことない術式だった」  
しかもしっかりばれてるし。

「貴様は何者だ？何の目的があって主ははやてに近づく」

一触即発の雰囲気です。接してくるシグナム姐さん。うーん・・・安い嘘は命を失いかねないな。

「あの子を助けるためだ」

「われわれで事足りる」

だろうな。シグナムはそういう性格のはずだ。

「だけど、それが切羽つまつてるのは事実なんだろう？下手をすれば今年中に死ぬ」

「！・・・それは」

「ここに来て初めての友達になれそうなんだ・・・それに、救える命は救うべきだ」

「・・・信用しろと？」

「信用するかはお前から次第だ」

「アタシは信用しねーな」

「胡散臭いからか？」

「それもある。けどお前にそれをできるだけの力あんのかよ」

ふむ・・・こいつらからしたら未知数の力だもんな。それならちょっとだけ気合入れてみるか。

軽く、魔力を解放する。すると尋常じゃないほどの魔力の奔流を生んだ。

ちなみに俺は・・・膨大な魔術回路にネギ親子ですら到底適わない魔力、そして世界最高峰のリンカーコアを有している。こんだけありゃあ信用を勝ち取るだけの魔力は十分すぎるだろ？

「これは・・・」

「どうだ？こんだけありゃいけるだろ。なんなら、魔力を闇の書に食わせてやるよ」

「・・・そこまでして貴様にメリットはあるのか？いくら主を思っ  
ての行動とはいえ・・・」

「俺ははやてを救えたら十分だ」

シグナムはしばし考え込む。その未出した結論は。

「・・・わかった。貴様がいいというのなら、協力してもらおう」

「オーケー。もちろんはやてには秘密だぞ」

「無論だ」

というわけで、シグナムらと協力して蒐集を行うことになった。と  
いうか・・・。

「もしかして今から行くとか言うんじゃないだろうな」

「あ？今からに決まってるだろうが」

という事はもう蒐集がはじまってんのかよ！ならここは少なくとも  
10/27以降の話か。

「ん、じゃあ行くっか」

「ああ」

そんなわけで、名も知らぬ世界に来ちゃってます。藤岡弘がここで  
探検していても絶対不信感を抱かないような密林にいたい何があ

るんだよ？

「で、ここにリンカーコアを持つてるやつがいるのか」

「ああ、そうだ。少なくとも5は反応がある」

レヴァンティンの柄に手をかけながらしゃべるのはシグナム。今回は初めてという事でシグナムだけが付いてきてくれるそうなの。しかし人っ子一人いない。さりげなく感じる不快感を無視しながら

散策していると、突如魔力が増大するのを感じた。

「来るぞ！！」

シグナムの言葉で散開する。すると、数瞬おいて元いた場所に大きなクレーターができています。

回避しながら地面を穿った敵を確認すると、なんかFFの結構終盤に出てきそうな魔物がいた。

「アバドン……」

FF9に出てくるカマキリっぽいそれは、体勢を立て直すと、すぐさまかまいたちを放ってくる。俺は万難排す<sup>アイギス</sup>魔除けの楯で防御したがシグナムは。

「はあ！！」

ぶった切っていた。おいおい、いくらなんでも暴挙じゃないか。

「いつの間に盾をだしたんだ！？」

「こいつが俺の能力なんでね。こいつは俺がやるから下がってる」

「しかし「それに、俺の実力を見たいだろう？」くっ……」

しづしづと、シグナムは下がる。よし、では行くうかね。

「来い、『あめのむらくも雨叢雲』」

名前こそ日本名だが、実態は西洋型の剣。ヤマタノオロチを討つた際に出てきた剣で、その力は日本の宝具では非常に強力な剣だ。それを振りかざして、アバドンに斬りかかる。が、右のカマで受け止められた。

「グギヤアアアア!!」

うげ・・何度聞いても不快感を煽る鳴き声だ。雨叢雲で正面から受けた後、うまく受け流してアバドンの懐にうまく入り込んだ。さて、試しなかった剣技をここで出してみますか!

そう考えた俺は剣を縦に構えて魔力を溜める。思い切り溜めてもいいんだけど、溜めている間に攻撃を受けるわけにもいかないからすぐに解放した。

「シヨック!!!」

ずがああああん!!!

すると、アバドンが粉々に吹き飛んだ。・・いやあ、いくら圧縮魔力を1点で思い切り解放する単体攻撃があんなに破壊力抜群とは・・・。恐れ入った。

「なんて無茶苦茶な・・・」

シグナムもむちゃくちゃ引いていた。ごめん、やりすぎた。

結局、5匹のターゲットは俺が全部片づけた。



第3話 いや、こんな展開じゃなかったよな（後書き）

千里「・・・で、非常に頭の悪い展開だったな」

作者「さーせんー!!」

千里「で、A・Sもぜんぜんと」

作者「う・・・」

千里「まったく。そんなでよくA・Sから書こうなんて思ったな」

作者「しょうがないじゃないか・・・書かないと置いて無駄に練った原作をベースとしたオリジナルの展開考えてたし。それにはどうしてもここから書く必要があったんだよ」

千里「まずはA・Sを見る!」

作者「大丈夫、細かい描写はともかくあらすじはなんとか押さえてるから」

千里「さいで」

作者「それではこんな駄作を読んでくださった方には多大な感謝を。それでは次回はなのはsideにも介入します!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9916z/>

---

魔法少女リリカルなのはRewrite

2012年1月2日02時46分発行